HOKUGA 北海学園学術情報リポジトリ
学校法人北海学園
北海学園大学
北海商科大学

タイトル	マクルーハンによるヤコブソン理解のドグマ ： 通信モデルとの連続性と断絶
著者	柴田，崇；SHIBATA，Takashi
引用	北海学園大学大学院文学研究科(11)：92-147
発行日	2014-12-25

Hokkai-Gakuen Organization of Knowledge Ubiquitous through Gaining Archives.

［論文］

マクルーハンによるヤコブソン理解のドグマ
――通信モデルとの連続性と断絶

柴田　崇

はじめに

拙著『マクルーハンとメディア論』(1)を公刊しておよそ一年が経過した。同書の「はしがき」で書いたとおり、M・マクルーハン（McLuhan, M. 一九一一～一九八〇年）の思想は難解な部類に入ると言ってよい。難解さの原因としては、まず、文学を基礎にしたマクルーハンの博覧強記が一因に挙げられる。アフォリズムを駆使し、論理的な読解による理解を妨げる書き方も原因の一つに数えられるべきだろう。同書では、マクルーハンの戦略に抗ってあえて論理的な読解を推し進め、その思想全体を貫く不変の構造、あるいは理論を取り出すことを試みた。不変構造の特定を志向してはじめて、理論の発達過

程としてマクルーハンの思想の縦断的な変化を記述できると考えたからである。試みの成否については同書を読んで御判断いただきたい。

さて、「はしがき」には、僭越ながらマクルーハンの一研究者として、マクルーハンを読む際の心得も書いた。マクルーハンの著書を繙けば、五〇年前に書かれたにもかかわらず、二一世紀の最新のメディアとその特性を言い当てたかのような一節が見つかることがある。拙著では、そのような一節の引用を目的にした読み方をやや批判的に「状況的な読み方」と名付け、不変構造を取り出すことを目的にした「構造的な読み方」、そして「構造的な読み方」を追究する上で必須の、概念の歴史を追跡する読み方、すなわち「系譜学的な読み方」に対置した。後者二つの読み方で得られた不変構造には、理論と呼ぶに相応しい体系性が認められ、この理論の発達過程が、時間軸に沿って並べたマクルーハンの著作群における主題の変遷と対応することも論証できた。論理的な思考を忌避しつつ、マクルーハン自身は極めて自覚的に理論の構築を志向していたのである。

「系譜学的な読み方」を通じて、理論構築で使用した概念の歴史性についてマクルーハンがそのすべてを自覚していた訳でないことも判明した。例えば、理論構築の過程で重要な役割を果たした概念の一つに「外化 externalization」がある。マクルーハンはこの概念の意味を原義に忠実に理解していた。しかし、その理解は同時代の然るべき思想を参照し、正しく引用したことによるある種の偶然の賜物であり、概念の思想的系譜を過去に向かって辿り、源流を特定する自覚的作業の結果として得られたものではなかった。

また、「終章」に書いたように、「マクルーハンの著書は、同時代のアーカイヴであると同時に、過去

から続いてきた重要な思想の系譜をまとめ、未来のために保存するアーカイヴの性格を持つ」。ここで言いたかったのは、二種類のアーカイヴがあるというのではなく、現在使われている概念を精査し、保存する作業が過去から現在を経て未来に伸びる思想の糸のノード（結び目）を自ずと形成する、という事実である。博覧強記のマクルーハンの著書は、良くも悪くも申し分のないノードである。というのも、「外化」に関するように源流につながる系譜を保存する正統かつ正当な理解がある一方、同時代の通俗的な見解を反映した理解も散見されるからである。通俗的な見解は時代の空気でもあり、それらの保存に積極的な意味を見出すことも不可能ではない。また、正統から外れることで、停滞した意味を動かし、概念に新しい価値を付与する詩的効果も期待できる。とはいえ、通俗的な見解が正統性を主張し始め、正当な理解が妨げられる危険が生じるのを見過ごすわけにはいかない。概念の歴史性に無自覚な著者は、通俗的な見解が正統性の衣を纏い、教条化するのにも無自覚である。概念の歴史性を語る以上、正統を詐称する概念が蔓延るのを等閑視してはなるまい。

教条化した通俗的理解＝ドグマのなかには、自ずと馬脚を露わすものもある。後世の読者は、時間の利益を享受する有利な立場にあり、ドグマの自然崩壊に立ち会う僥倖に恵まれることもある。しかし、読者が著者とほぼ同時代を生きる場合や、ドグマが広く流布し、正統の地位を簒奪するに至った場合、自然崩壊に賭けても勝ち目はない。自然崩壊しないドグマには、外から働きかけて崩壊を促す必要がある。著者にその責任があることは言うまでもないが、著者の発言に懐疑を差し挟まないならば、読者は結果的にドグマの拡散に加担することになる。

思想の真価を問う際、ドグマの検証は避けて通れない。ソーカル事件[2]を持ち出すまでもなく、あ

る人物が斯界の理解とかけ離れた通俗的な見解を援用するとき、ドグマを拡散したという事実についてはいかなる言い訳も通用しない。しかし、ドグマの援用という事実のみで当該人物の思想が無価値になると考えるべきでもない。読者の懐疑は、ドグマへの警戒とともに、著者の意図を理解し、その思想の真価を判断する建設的態度を基礎とするのが望ましい。もちろん、ここで言う「意図」は、第一章で取り上げる通信モデルにおける「意図」とは全く別ものの、著者自身にとって必ずしも自明でない「意図」であり、著者の独特の「語り方」を分析するなかで明らかになってくる「意図」である[3]。そのような意味での「意図」を理解する試みが、思想の真価を判断する上で必須の作業だと考える。

本稿の主題は、C・E・シャノン（Shannon, C.E. 一九一六〜二〇〇一年）が考案した通信モデルとR・ヤコブソン（Jakobson, R. 一八九六〜一九八二年）の言語モデルとの連続性を検証するところにある。マクルーハンの著書には、通信モデルと言語モデルを同類と見做す記述がたびたび登場する。結論から言えば、二つのモデルの連続性を強調し、両者を同類と見做す見解は、ドグマの謗りを免れない。

以下の構成で、ドグマの存在を指摘しつつ、マクルーハンの意図に迫りたい。

第一章では、まず、通信モデルの概要を示し、このモデルの主題を理解する。そして、マクルーハンがシャノンらの通信モデルへの批判を出発点に自らの理論を構築した過程を追跡するなかで、通信モデルとヤコブソンの言語モデルがどのように関連付けられたかを確認する。第二章では、C・S・パース（Peirce, C.S. 一八三九〜一九一四年）の記号論に造詣の深い学派による言語モデルの理解を紹介する。通信モデルとの連続性が強調される風潮のなかで、両者の異質性を論証し、言語モデルを別の系統に位置づけた研究は特筆すべきである。第三章では、本事案を梃子にマクルーハンの意図を再確認し、その

思想の真価に迫る。結論を言えば、通信モデル批判を出発点にしたマクルーハンの思想には、通信モデルの課題を自覚していたヤコブソン、およびその正統な継承者たちの思想と並行して進むベクトルが認められるのである。

論考に先立って、読者という以上にマクルーハンの研究者を名乗る筆者もマクルーハンと同じドグマに囚われていたことを付言しておかなければならない。筆者は、マクルーハン同様、二つのモデルの連続性、より正確に言えば同質性を前提に議論を進め、その前提を疑わなかった。結果的に、拙著の議論は、マクルーハンの解釈という範囲では破綻のないものになった。そして、マクルーハンの思想に含まれていたドグマを追認することで、ドグマの拡散に加担することになったのである。本稿は、通信モデルと言語モデルの断絶を強調する点で拙著への修正を含んだ補遺である。斯界からのご指摘[4]と、修正の機会に感謝したい。

第一章

マクルーハンは、一九六四年の主著*Understanding Media*（『メディアの理解』）でシャノンの通信モデル、および情報理論を名指しで批判している。曰く、情報理論は、意図したメッセージの「内容content」のみに焦点をあて、メッセージを歪めるノイズを監視する一方で[5]、伝達の「形式form」を無視する傾向がある[6]。マクルーハンによる批判を理解する鍵が、「内容」と「形式」にあるのは明らかだが、批判の検証に取りかかる前に、まず通信モデルの概要を理解しておきたい。というのも、

通信モデルは、マクルーハンの思想のみならず、二章以下でヤコブソンの言語モデルの特徴を理解する際の指標にもなるからである。

本章では、通信モデルの概要を理解した後、マクルーハンによる通信モデル批判、および言語モデルとの関連付けの根拠を検証する。

1―1

一九四八年、シャノンは、デジタル通信時代を幕開ける論文“A Mathematical Theory of Communication”を発表した。数式で埋め尽くされたこの論文は、一部の専門家以外には理解できないものだったが、翌年、W・ウィーヴァー（Weaver, W. 一八九四～一九七八）による解説を付し、一般読者にもシャノンの理論の概要が理解できるよう工夫した*The Mathematical Theory of Communication*（『コミュニケーションの数学的基礎』一九四九年）が公刊された。一九六九年に明治図書出版から邦訳が出た後、長らく絶版状態が続いていた。二〇〇九年に筑摩書房から別訳の文庫版で出たことで、現在では、この歴史的著書をより簡単に手に取ることができるようになった。

シャノンの理論が電気通信に数学的基礎を与え、通信技術の発展に寄与したことはもはや常識と言ってよい[7]。本稿では、通信モデルの本体ではなく、通信モデルが他の領域、特に人間のコミュニケーションの領域に援用されたことの問題点を取り上げることになる。

通信モデルの特徴は、メッセージとシグナルを分離することで「流れるメッセージ」の図式化に成功したところにある[8]。電話を例に取ると図1のようになる。

図1

(1)情報源	(1)電話口の話者
(2)メッセージ	(2)その人の発したことば
(3)トランスミッター	(3)電話機の送話器
(4)チャンネル	(4)電気信号に変換されたことば(シグナル)が通ってゆく電線
(5)レシーバー	(5)別の電話機の受話器
(6)目的地	(6)聞き手

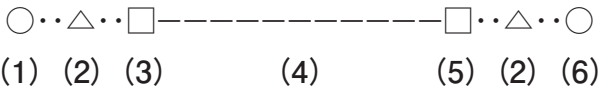

図1から、(3)と(5)、または(4)、または(3)から(5)までを「メディア」と規定する通念が通信モデルに由来するのが理解できる。

一連のプロセスを図式化したこのモデルでは、六つ(シグナルを入れれば七つ)の要因がそれぞれの機能を担いながら一つのコミュニケーション像を構成している。そこで(3)(4)(5)の三つの要因は、メッセージをシグナルに変換=符号化 encodeし、そのシグナルを別の場所に伝達した後で再びメッセージに再変換=復号化 decodeするまでの機能を担い、「流れるメッセージ」の様態を支える働きをしている。三つの要因とそれらが担う機能からは、メッセージとシグナルの「承認された変換(通常一対一で可逆的な変換)」を可能にした技術的背景が読み取れる。つまり、「承認された変換」を技術的に保証できなければ、このような図式化は不可能だっただろう。

「承認された変換」が常態ということは、情報源から発せられたメッセージが、目的地のメッセージと同一のものであることを要求する。電気技術によって可能にな

った伝達を図式化したこのモデルは、メッセージの正確な再現を主題とするコミュニケーション観を創り出した(9)。

このように通信モデルでは、メッセージは、送り手によって意図された通りに、そのままの内容で受け手に届かなければならない。仮にメッセージに干渉するものあれば、それらはすべて好ましくないノイズと見做される(10)。ノイズという変換の異状が生じると、変換を保証する諸要因(3)(4)(5)に焦点があたり、その不備が問われることになる。つまり、通信モデルにおけるメディアは、正しく機能している間は問題にされず、異状が生じたときに初めてノイズの発生源として問題にされる存在なのである。

1―2

通信モデルにおいて、メディアは、確かに、送り手と受け手の地点で等価であることの保証、すなわち「メッセージは(=)メッセージ」の等式の保証という重要な機能を担っていた。しかし、メディアはそれ自体のメッセージを持たないという意味で透明であり、またそうでなければならない存在だった。『メディアの理解』でのマクルーハンの批判、すなわち、通信モデルが意図したメッセージの内容に焦点をあてる一方、伝達の形式を無視する、との批判は、正鵠を得たものと評価できる。

マクルーハンは、内容よりも形式、メッセージよりもメディアこそが考察の中心に置かれるべきだと考えた。前者から後者への転換を一言で言い表したのが、マクルーハンの代名詞とも言える“The medium is the message.”(「メディアはメッセージ」)である。「メッセージは(=)メッセージ」の等式が自明のものとして流通するなか、マクルーハンは、考察の中心に置かれるべき重要な「メッセージ」は、送

り手が意図したメッセージの内容ではないと言い放った。すなわち、メッセージは「メッセージ」ではない。メディアこそが、真の「メッセージ」を発していると宣言したのである[11]。

処女作*The Mechanical Bride*(『機械の花嫁』)を公刊した一九五一年とキャリアを閉じた一九八〇年から換算すると、『メディアの理解』を発表した一九六四年はちょうど中間点にあたる。『メディアの理解』および、前作の*The Gutenberg Galaxy*(『グーテンベルクの銀河系』一九六二年)で世界的に認知されるメディア研究者の名声を手にしたマクルーハンは、中期以降、後期に至るまで一貫して通信モデルを批判し続ける。ちなみに、マクルーハンは生涯に二〇冊以上の著書(論文を含まない)を発表しているが、厳密に単著と呼べるものは、論文集を除けば意外にも上記の三冊以外に二冊しかない。二冊のうち、一冊は*Culture is Our Business*(『文化はわれらの仕事』一九七〇年)、もう一冊は*The Classical Trivium*(『古典的三科』二〇〇六年)である。『文化はわれらの仕事』は、広告の批評という点では『機械の花嫁』と同一のモチーフだが、右ページに掲載された広告写真についての短い箴言を左ページに載せたレイアウトからは、一九六〇年代半ば以降の芸術家たちとの共著作品の影響が見て取れる。また、『古典的三科』は一九四三年にケンブリッジ大学に提出した博士論文を修正したものである。拙著でも紹介したが、カナダの一英文学者が一世を風靡する時代の寵児に変身した背景には、*Explorations*誌(『探求』一九五三〜一九五九年)の存在があった[12]。同誌を主宰して以来、孤独な思索よりも、異なる領域の研究者たちとの対話のなかや、芸術家とのコラボレーションのなかで新しいアイディアを得たり、それを表現したりするのがマクルーハンの基本的なスタイルになったようである。『メディアの理解』以後、通信モデルへの批判が最も鮮明に現われた後期の二冊、*Laws of Media*(『メディアの法則』一九八八年)と*The*

Global Village(『地球村』一九八九年)もまた、共著である。

『メディアの法則』は、一九七〇年代前半に着手した研究[13]を、マクルーハンの死後、長男でありメディア研究者でもあるエリック(McLuhan, E 一九四二年〜)が共著者としてまとめたものである。『メディアの法則』と同じくマクルーハンの晩年の思索をまとめ、やはりマクルーハンの死後に公刊されたのが『地球村』である。同書の共著者のB・R・パワーズ(Powers, B. R. 一九二七〜二〇一二年)によれば、一九七六年に執筆が始まり、完成したのは一九八四年だった[14]。この二冊にはかなりの部分で重複が見られる。共著、とりわけ死後に編まれた共著を文献とする場合、アイディアの帰属について慎重にならなければならないのは言うまでもないが、ここでは、ひとまず、同書にあるアイディアは少なくともマクルーハンが首肯したものと見做し、マクルーハンの思想の一部として取り扱う。

『メディアの法則』と『地球村』の内容が重複することは既に述べたが、通信モデルへの批判を展開した箇所では、内容のみならず構成も極めて類似している。以下、論点を対照させながら、両著を通じたマクルーハンの主張を考察する。

マクルーハンは、『メディアの法則』の第二章と、『地球村』第六章で、本稿の図1に相当する模式図を示しながら通信モデルを大々的に批判している。

> (シャノンとウィーヴァーの通信モデルは)ソフトウェアの内容のためのハードウェアの容器という、ある種のパイプライン・モデル pipeline model である。このモデルは、『内部』と『外部』という考えを強調し、コミュニケーションを、共鳴的な制作 resonant *making* というよりも、正確な

照合 literal *matching* と想定している(McLuhan & McLuhan 1988 : 86)。

現代の西洋におけるコミュニケーション理論の基礎―シャノンとウィーヴァーの通信モデル―は、左脳的な線状的バイアスの典型例である。通信モデルは、ソフトウェアの内容のためのハードウェアの容器という、ある種のパイプライン・モデル pipeline model であり、それを取り囲む環境を無視している。このモデルは、内部と外部という考えを強調し、コミュニケーションを、制作 making というよりも、正確な照合 literal matching と想定している(McLuhan & Powers 1989 : 75)。

二つの引用からは、マクルーハンが、まず、通信モデルがパイプラインのモデルであり、コミュニケーションの前提を制作ではなく合致に求めるところを批判しているのが分かる。また、前者では「制作」が共鳴的である点、後者では「『内部』と『外部』の考え」が「環境の無視」と関連する点が補足されている。以上の箇所には、いずれも『コミュニケーションの数学的基礎』からの引用が続く。そして、次の一節が登場する。

クロード・シャノンは、左脳的に真実らしいことを「第一の目的」とする観点から自らのコミュニケーション理論を提示する。「コミュニケーションの基本的問題は、あるところで選択したメッセージを別なところで正確、あるいは近似的に再現するという問題である。しばしばメッセージは意味 meaning を持つ」(McLuhan & McLuhan 1988 : 87)。

クロード・シャノンは、左脳的に真実らしいことを『第一の目的』とする観点から自らのコミュニケーション理論を提示する。

「コミュニケーションの基本的問題は、あるところで選択したメッセージを別なところで正確、あるいは近似的に再現するという問題である。しばしばメッセージは意味 meaning を持つ」(McLuhan & Powers 1989 : 76)。

『メディアの法則』では『コミュニケーションの数学的基礎』からの引用が地の文のなかにあり、『地球村』ではそうではないという違い以外、一字一句変わりない。両者はともに、通信モデルが左脳的観点からコミュニケーションを規定する、いわば左脳的モデルである点を指摘した上で、左脳的発想が使用者や感受性の地を無視するものであると主張する。

二著の該当箇所は、アリストテレス(Aristotelēs 前三八四〜前三二二)とN・フライ(Frye, N. 一九一二〜一九九一年)への批判を経て、以下のように通信モデル批判を総括している。

すべての西洋の科学的コミュニケーション・モデルは—シャノンとウィーヴァーのモデルのように—動力因のパターンに従い、線状で、論理的で、継起的である

これらはすべて左脳特有の地を欠いた図の様式に基づくものであり、同時並行性、非連続性、

共鳴という、電子的文化における体験を特徴付ける顕著な効果には全く順応していない。電子時代においては、右脳のコミュニケーション・モデルこそが必要とされる。なぜなら、われわれの文化はその認識の様式を左脳から右脳に移行させる過程をほぼ完了しており、電子メディアそのものがそのパターンや働きの点で右脳的だからである。問題は、左脳志向の伝統の残滓が残っているわれわれの文化に合ったモデルを発見することである。そのようなモデルは、いかなる地からも切り離された抽象的な因果的連鎖や変化にだけ集中する代わりに、図と地の並置を考慮したものでなければならない(McLuhan & McLuhan 1988 : 90-91)。

このように、すべての西洋の科学的コミュニケーション・モデルは―シャノンとウィーヴァーのモデルのように―動力因のパターンに従い、線状で、論理的で、継起的である。これらはすべて左脳特有の地を欠いた図の様式に基づくものであり、同時並行性、非連続性、共鳴という、電子的文化における体験を特徴付ける顕著な効果には全く順応していない。(中略)電子時代においては、右脳のコミュニケーション・モデルこそが必要とされる。なぜなら、われわれの文化はその認識の様式を左脳から右脳に移行させる過程をほぼ完了しており、電子メディアそのものがそのパターンや働きの点で右脳的だからである。問題は、左脳志向の伝統の残滓が残っているわれわれの文化に合ったモデルを発見することである。そのようなモデルは、いかなる地からも切り離された抽象的な因果的連鎖や変化にだけ集中する代わりに、(必要に応じて左脳と右脳が共に働いたり、独立して働いたりする)図と地の並置を考慮したものでなければならない(McLuhan & Powers 1989 : 80)。

前者で「すべての西洋の科学的コミュニケーション・モデルは―シャノンとウィーヴァーのモデルのように―動力因のパターンに従い、線状で、論理的で、継起的である」がイタリックの見出しに格上げされている以外、両者は全く同じである[15]。

二著の主張は次のようにまとめられる。

①通信モデルは左脳的なコミュニケーションのモデルである
②左脳的であるとは、線形的、論理的、継起的である
③右脳的であるとは、同時並行的、非連続的、共鳴的である
④左脳的なコミュニケーション・モデルは、地を欠いた図の様式を取る
⑤左脳的な西洋の伝統は、現在の右脳的な電子技術の時代と乖離している
⑥右脳的なコミュニケーションのモデルを確立するのが急務である

『メディアの理解』の該当箇所と比べて、左右脳と「図と地」の議論に新しさが認められる。脳局在論の援用は時代の空気を取り入れたものだろうか[16]。

中期の通信モデル批判がメッセージの内容のみを重視する姿勢にあったことを想起すると、後期に至り、批判の焦点が別の箇所に移動したかの印象を受けるが、実は、後期の批判は中期のそれを前提に展開している。この点は、中期の議論を前提に解釈することで、左右脳と「図と地」の議論がうまく整理

できるところから証明できる。中期の議論を前提にしなければ、新しく加わった批判のための概念を整理できないと言ってもよいだろう。より具体的に言えば、左右脳、および図と地の二分法は、『メディアの理解』で展開する形式と内容の二分法の議論を前提にして初めて理解できるのである。

『メディアの理解』には、前出の通信モデル批判から読み取れる通常の意味の形式と内容の用法に加え、マクルーハン特有の形式と内容の用法が見られる。「どんなメディアもその『内容』は常に別のメディアである。ちょうど書かれたことばが印刷の内容であり、印刷が電信の内容であるように、書きことばの内容は話しことばである」(McLuhan 1964 : 8)。「『メディアはメッセージ』とは、電子工学の時代に関していえば、全く新しい環境が生み出されたことを意味している。この新しい環境の『内容』は、工業の時代の古い機械化された環境である」(McLuhan 1964 : vii)。

この独特な二分法を理解するには、『メディアの理解』がある種の文化史観を基礎に書き上げられているところに注目する必要がある。同書の冒頭を読むと、現代が、三〇〇〇年に及ぶ西欧史上の第三番目の節目、すなわち、前機械、機械に次ぐ電気技術の時代と規定されているのが分かる[17]。マクルーハンは、各時代を、それぞれアルファベット、活版印刷、電信というメディウムに支えられた文化史的区分として提示する。各文化を先導した三つのメディウムは、特に発明と呼ばれ、発明、あるいは発明が先導した技術を基準にして、雑種 hybrid としての個々のメディウムが論じられる。例えば、映画は、「古い機械技術と新しい電気技術との華々しい結婚の産物」(McLuhan 1964 : 284) とされる。

マクルーハンの文化史観は、最初の区分を形成したアルファベットの特性を敷衍したものになっている。すなわち、アルファベットは、話しことばを音素という等質の断片的視覚物に翻訳する。音声から

意味を取り去った後に視覚的コードに移し替えるという表音文字の特性は、新しい技術がそれまでの古い技術に対して占めるコードの地位を示唆するものだったのである。従来のコード概念がパロールに対するラングの地位を占めるのに対し、マクルーハンのコード概念はパロール(声)に対するアルファベット(文字)の地位を占める。マクルーハンは、アルファベットが声に対して持つ翻訳の機能をアルファベット以外の発明にも認めることで、三〇〇〇年に渡って新たな技術「形式」が、古い技術を「内容」として翻訳してきた歴史として西欧文化を捉え直そうとした。そして、古い技術に基づく文化的マトリクスを新しい技術が翻訳するプロセスで人間に及ぼされるものが、メディアの影響、すなわち「メッセージ」だと考えたのである。

内容と形式は、上記の文化史において新旧のメディア環境に対応している。

文字以前の世界では、ホメロスに代表される吟遊詩人たちが聴覚的、あるいは非視覚的コミュニケーションの中心に君臨していた。聴覚的なメディア環境に対応して聴覚的な文化が形成され、その代表者が口承に長けた詩人たちだったのである。口承詩の内容は、口承の形式、すなわち声というメディアに対応している。マクルーハンが内容よりも形式を重視した理由はここにある。そしてマクルーハンは、詩人たちが声のメディア環境に最も適応できた理由を、聴覚を司る右脳の発達に求めたのである。

この安定した世界は、アルファベットの普及によって一変する。音声言語を断片的な視覚的コードに移し替える表音文字には、使用者の視覚的傾向を助長する特性がある。アルファベットは、そのメディア環境に対応する文化を要請し、吟遊詩人を文化の中心から追放する一方で、哲人を登場させた。人々は、物事を抽象化し、論理的に組み立てる左脳の発達を称揚する文化を形成し始めた。以来、西洋(西欧)

では、徐々に視覚的傾向を強め、アルファベットで書かれた書物の大量生産に成功する活版印刷技術の発明を経て、究極の視覚的文化が形成された。

西洋文明は、その第二の位相に至り、完全に視覚的なものになっていた。この完全な適応状態を破壊したのが、第三の発明の電信だった。マクルーハンは、約一〇〇年前にG・マルコーニ(Marconi, G. 一八七四〜一九三七年)が無線電信を世に送り出したとき、メディア環境の特性が、視覚的なものから聴覚的なものに向かって転回し始めたと考えたのである。

メディア研究の主題がメディアの「メッセージ」を理解することにあるのは、もう説明を要しないだろう。では、なぜカナダの一英文学者が「メッセージ」を理解する必要に迫られたのか。それは、メディア環境で生起する現実を認識する際に齟齬が生じたからに他ならない。左脳的な西洋的伝統は、現在の右脳的な電子技術の時代と乖離しており、それゆえ、伝統を引きずる左脳的なコミュニケーション・モデルでは現実を理解できない。右脳的なコミュニケーション・モデルの確立こそがマクルーハンの終局目標だったと言って間違いない。

では、右脳的なモデルとは、いかなるものか。左脳と視覚、右脳と聴覚の対比から、端的に、右脳的モデルを聴覚的なものと考えたくなる。しかし、マクルーハンは、両感覚の二項対立を忌避し、両者を調停する第三の感覚を持ち出す。この第三の感覚こそ、右脳的モデルを理解するための鍵になる。「聴覚的な空間が同時並行的な諸関係の領域であるように、触覚的な空間は共鳴する間隙の空間である」(McLuhan & McLuhan 1988 : 22)。感覚様相毎に創出される空間の説明のなかで、マクルーハンは、共鳴的な間隙を触覚に帰属させている。右脳的モデルの特徴に「共鳴」があったことを想起すれば、右脳

モデルを単純に聴覚的と言い切るのは無理がある。右脳的モデルは、少なくとも、聴覚の特徴と触覚の特徴を併せ持つものでなければならない。

右脳的モデルの詳細を、マクルーハンが第三の感覚様相を必要とした理由から考えてみよう。マクルーハンは、感覚様相毎の空間の説明に続けて、視覚と聴覚を二項対立的に把握する態度への批判を展開している。

> 西洋的な世界は、(中略)視覚的な空間と聴覚的な空間の対立という問題に直面して身動きできなくなっている。西洋的な人間は、たとえ聴覚的な世界のなかでもがき苦しむとしても、視覚的なものに固執している。ゲシュタルト心理学は、その図―地パラダイムによって、視覚的な空間からすでに一歩踏み出した。しかし、(中略)ほとんどの心理学者は、いまだに図と地の双方が視覚的な状況における視覚的構成要素だと考えている。実際には、図と地のパラダイムは、両者の間にある共鳴する隔たりによって規定された、イコン的 iconic または触覚的な関係を形成する。すなわち、図―地の関係には、連続性や連結関係はない。その代わりに、変形 transforming の類の界面 interface がある(McLuhan & Powers 1989 : 22-23)。

西洋的な人間の多くは、視覚的なものからなかなか抜け切れない。その結果、同時並行的、かつ共鳴的な関係を記述できるはずの図―地のアイディアを手にしながら、このアイディアの本質を視覚的発想によって誤解してしまう。すなわち、このアイディアに依拠しながら、両者の関係を、連続性や連結関

係と見誤ってしまう。

では、共鳴的関係とは？　連続性や連結関係とそれはどのように異なるのか？　E・ルビン（Rubin, E.一八八六～一九五一年）による「ルビンの壷」を思い浮かべればよい。壷が図として知覚されるとき、壷以外の部分は背景に退き、地として図の知覚を支える。他方、人の横顔が図として知覚されるとき、横顔以外の部分が地になる。壷と横顔は常に反転し、壷と横顔が同時に知覚されることは決してない。マクルーハンは、こうした反転によって互いを顕在化させ合う動的関係を「共鳴的」と表現したのである。そして、図のみで知覚が成り立つと考えたり、図と地を切り離し、図と地を連続した図―図関係で知覚できると考えたりすることを、「西洋的」、あるいは「左脳的バイアス」と批判したのである(18)。

左脳のバイスの下にある西洋人は、二つの対象を、同じ地平にあって連続、または連結したものとして把握する、換言すれば、両者を共約する同一パラダイム内における関係で把握する(19)。これに対し、マクルーハンは、異なるパラダイム間同士、つまり共約する地平を持たないという意味で異質のもの同士の、反転し合う関係を共鳴的関係と呼び、それを触覚的なものと規定した。触覚の様相が加わることで、視覚と聴覚を同一地平で比較し、前者と後者の連続性や連結関係を前提に、前者から後者へ線状の移行として歴史や文化を考える立場は、明確に否定される。マクルーハンの文化コード論は、この意味で触覚的なものとして理解されなければならない(20)。

最後に、なぜマクルーハンが図と地のアイディアを敷衍したモデルを構想したのか、あるいはできたのかについて考えたい。『メディアの理解』について十分な理解があれば、後期の論考で図と地の議論がことさら強調されていても唐突の感は覚えないはずである。なぜなら、パラダイムの語と関連付けて

語られる図と地の議論は、前出の文化コード論、および文化コード論に基づく認識の可能性を下敷きにしているからである。

便宜的に、アルファベットが形成した文化を第一パラダイム、印刷技術の文化を第二パラダイム、電信以降の文化を第三パラダイムと呼ぼう。一九世紀末、第二パラダイムの末期に至り、西洋文明は究極の視覚的文化の位相にあった。自分たちは視覚的文化に浸かり、視覚的バイアスの下にある。西洋人がこの事実に気づいたのは、潜在的な領域にあって意識されてこなかった第二パラダイムを顕在化、あるいは図化させる地が現われたからである。二〇世紀初頭の第三パラダイムの登場によって、第二パラダイムを図化する地が形成された結果、西洋人は、自ずと顕在化した第二パラダイムを認識する機会に遭遇したわけである。マクルーハンは、このように生起した外発的な認識のメカニズムの知見をもとに、図と地の反転を意識的につくりだす内発的モデルを着想し、その構築を試みたのである。第三パラダイムを地にして第二パラダイムが図化した事実を梃子にすれば、第二パラダイムを地に第三パラダイムを理解できる。現在のメディア環境を考察した『メディアの理解』に先立って、第二パラダイムまでの歴史研究が大部分を占める『グーテンベルクの銀河系』が書かれたのは、故ないことではなかった(21)。

マクルーハンの論考では、後期に至るまで一貫してこのようなパラダイム論が基調になっている。注意すべきは、マクルーハンが、図―地の共鳴的関係を理解したからといって誰もが簡単に第三パラダイムの理解できるわけではない、と考えていたことである。文化コード論が語られた『メディアの理解』は、メディア研究の出発点に過ぎない。マクルーハンによれば、メディア環境の変化に気づいて警鐘を鳴らしたのは、T・S・エリオット(Eliot, T. S. 一八八八〜一九六五年)のように「言語と文化の全体性

を、個人的才能がかかわりを持つべき統一された地」(McLuhan & Powers 1989 : 21)と見做し、ことばによってそれを実践できた詩人たちに限られる。マクルーハンは、『メディアの理解』以降の全精力を、詩人たちが発揮した詩的能力の考察、そして、その知見に基づく詩論の構築に注いだ。マクルーハンのメディア研究は詩論に逢着し、マクルーハンが語るメディアの法則とは、詩的能力に関する普遍、一般の知識を指すのである[22]。マクルーハンの詩論については、本稿の第三章で再び取り上げることになるので留意されたい。

1—3

前節の議論を踏まえ、マクルーハンによるヤコブソン批判の意図を解明しよう。

マクルーハンのヤコブソン批判は、視覚的な発想から抜け切れない西洋人が図と地のアイディアを誤解していることの指摘に続く箇所に登場する。ここで言う西洋人には、各領域の研究者たちも含まれており、マクルーハンによれば、F・ソシュール(Saussure, F. 一八五七〜一九一三年)を筆頭に、並み居る構造主義者たちがこぞってこの陥穽にはまっている。そして、構造主義者の一員としてヤコブソンの名前が挙がるのである。

> 多くの研究領域で視覚的なものと聴覚的なものに関する混乱がどれほど存在するかは、言語と発話(ラングとパロール)の区別をしているソシュールの*Course in General Linguistics*(『一般言語学講義』一九一六年)にはっきりと見て取れる。ソシュールにとって、言語は全体的で包括的な同時並

存的構造（つまり右脳的で聴覚的なもの）の世界だが、継起的な発話は視覚的であり、相対的に表層的で左脳的な形態である。こうした言語と発話の区別に、ソシュールは通時的なものと共時的なものを関連付けている（McLuhan & Powers 1989 : 23）

確かにソシュールは、言語学の領域で、聴覚的なもの（言語）と視覚的なもの（発話）を区別している。マクルーハンは、この区別を図―地のアイディアの現われの一つと評価しつつ、言語と発話の関係の把握がアイディアの本質から外れているところを批判する。すなわち、言語と発話の関係を、以下のような共時態と通時態の関係に置き換えた時点で、アイディアの本質を見失っていると言うのである（以下の引用は、マクルーハンによるソシュールの引用の全文、ゴシックは原文のイタリックに相当）。

しかし、同じ対象に関係する現象の二つの秩序の対立と交差をもっと明確に示すために、わたしは、共時的言語学と通時的言語学という語を用いたい。わたしたちの科学の静態的な側面にかかわるすべてのことは共時的であり、進化にかかわるべきすべてのことは通時的である。それと同様に、共時態と通時態は、それぞれ言語のある状態と、ある進化の局面を意味する。

内的な二重性と言語学の歴史

言語の事実を研究するときにわたしたちが最初に驚かされることは、それらの事実の時間的な継続は、話者に関して言えば存在しないということである。話者はある状態と対面している。これこそ、ある状態を理解しようと欲する言語学者が、それを生みだしたあらゆる事柄に関する知識を放棄し、

通時態を無視しなければならない理由である。言語学者は、過去を完全に抑えこむことによってのみ、話者の心のなかに入っていくことができる。歴史の介入は、言語学者の判断を誤らせるだけである(McLuhan & Powers 1989 : 23)[33]

マクルーハンは、ソシュールによる通時態と共時態の説明から、視覚的なものと聴覚的なものを排他的に把握し、一方の考察のみで事足れり、とする姿勢を読み取る。このような姿勢は、従来の視覚的発想を引きずるものであり、視覚的なものと聴覚的なものを同時並存させて両者の間隙で起こる共鳴を感知し、それを記述する姿勢と程遠い。つまり、図―地のアイディアの意義を正確に理解しているとは言えないことになる。マクルーハンの批判の焦点は、通時態と共時態の区別そのものではなく、ソシュールによる両区分間の関係の把握にある。

マクルーハンは、図―地のアイディアの意義を正確に理解できていない例として、ソシュールに続けてC・レヴィ=ストロース(Lévi=Strauss, C. 一九〇八～二〇〇九年)、ヤコブソン、N・チョムスキー(Chomsky, N. 一九二八年～)を挙げる。そして、ソシュールを含む「構造主義者」たちを、次のように一刀両断にする。

彼ら(ヤコブソン、レヴィ=ストロース、チョムスキー)は皆、知らぬ間に、聴覚的な空間の共鳴する界面ではなく、連続と同質性をともなう視覚的な空間の構造にのめり込んでいる。構造主義に惹かれる者たちは、視覚的なものと聴覚的なものとの相反する本質の認識に失敗しているにもかか

わらず、彼らの研究している状況について包括的な相互関係性を発見しようと努力しているのである(McLuhan & Powers 1989 : 25)

マクルーハンの後期の著書からは、ヤコブソンを「構造主義者」と見做し、さらに「構造主義者」の発想を第二パラダイムのバイアスとして処理することで、間接的に通信モデルと関連付ける脈絡が読み取れる。次章ではヤコブソニアンの議論を踏まえて、ソシュールとヤコブソンを本章の議論の文脈で関連付けることの是非、あるいはヤコブソンを「構造主義者」に含めることの是非について考察する。そこから、ヤコブソンの言語モデルと通信モデルを連続的に理解することの可否について結論する。

最後に、話が前後するが、マクルーハンの「構造主義者」批判の文脈について付言しておきたい。上記の「構造主義者」批判は、人類学者のE・R・リーチ(Leach, E. R. 一九一〇〜一九八九年)による「構造主義の解説」に対する批判を出発点に展開する。マクルーハンは、リーチの構造主義理解が不十分であること指摘する議論を敷衍して、仮に正しく理解されようとも、現行の「構造主義者」の立論には根本的な瑕疵があると主張している。つまり、『地球村』では、リーチ批判がリーチの説明に登場する「構造主義者」の批判に発展し、「構造主義者」の該当する人物としてヤコブソンを含む三人の名前が挙げられているのである。リーチ批判が掲載されていない『メディアの法則』はもとより、『地球村』にも、上記の箇所以外にヤコブソンに関する言及はない。そして、両著の文献表にヤコブソンの著書は記載されていない。一般論としても、文献研究で一次文献の検証が省略されるならば、論の進め方に問題なしとは言えない。

二章

第二章では、ヤコブソンの継承者を名乗る学徒（ヤコブソニアン）のうち、パースの記号論に造詣の深い学徒が形成する学派によるヤコブソンの言語モデルの理解を紹介する。具体的には、シカゴ大学のM・シルヴァスティン（Silverstein, M. 一九四五年〜）、およびシルヴァスティンに師事した小山亘（一九六五年〜）らによるヤコブソンの言語モデル、および言語モデルを発展させた現代人類言語学の出来事モデルについての解説を紹介する。言語モデルを社会、文化、政治、経済領域でのコミュニケーションを考察する出来事モデルへ拡張した点はもとより、通信モデルと言語モデルの連続性が語られる風潮のなか、両者の異質性と断絶を強調し、論証した業績も特筆すべきであろう。

マクルーハンについての理解を促進するために書かれる論考にあって、本章の議論は、研究ノートに近い性格を持つ。筆者は、言語学の中でも難解とされるシルヴァスティンの専門家ではなく、言語学の専門家でさえない。本章でできるのは、本稿に必要な範囲でシルヴァスティンの思想の一端を紹介しつつ、内的整合性を確認する作業に限られる。門外漢による紹介が新たな誤解を生まぬよう細心の注意を払い、理解に不十分な点が見つかれば速やかに訂正したい。

本章では、通信モデルと同様に、まず、ヤコブソンの言語モデルを提示する必要があるだろうが、その前に、両モデルの連続的理解が、ヤコブソン自身のミスリードに拠るところもあるという事実を明らかにしておきたい。ヤコブソンは、一九五〇年代に、通信モデル、およびサイバネティクスに対する積極的評価を公言し、さらに言語学との連携を語る場面がしばしばあった。これらの発言の後に言語モデ

ルが発表されたことが、両者の連続的理解の傍証になってきた。この経緯とともに、言語モデルを提示した後、両モデルの主題を各要素から具さに検証することで、連続的理解の誤りを論理的に証明する。以上を踏まえて、最終節で、マクルーハンの著書、および拙著でのヤコブソン理解の是非を判断する。

2―1

情報理論と言語学という、一見接点のない分野のシャノンとヤコブソンを関連付ける補助線になるのが、メイシー会議である。メイシー会議とは、J・フォン・ノイマン(von Neumann, J. 一九〇三～一九五七年)とN・ウィーナー(Wiener, N. 一八九四～一九六四年)という通信技術の発展に寄与した大立者が中心になって組織、運営された学際的会議である。メイシー財団に後援された同会議は、工学知識の人文・社会科学への応用という明確な理念を掲げ、一九四六年から一九五三年にかけて十回にわたり開催された。初回からの参加者には、G・ベイトソン(Bateson, G. 一九〇四～一九八〇年)、M・ミード(Mead, M. 一九〇一～一九七八年)、K・レヴィン(Lewin, K. 一八九〇～一九四七年；第三回開催直前に死去)がいる。サイバネティクスと情報理論が人類学や心理学を皮切りに人文・社会科学に及ぼした影響を顧みると、思想史研究における同会議の重要性はもっと強調されてよいだろう。

記録によれば、シャノンは第七回(一九五〇年)、第八回(一九五一年)、第十回(一九五三年)に、ヤコブソンは第五回(一九四八年)に参加しており[24]、少なくとも同会議での両者の対面は実現しなかった模様である。ヤコブソンが同会議から受けた影響を推測する根拠の一つとなるのが、一九五二年にインディアナ大学で開催された「人類学者・言語学者の会議」を締めくくる次のスピーチである。

言語の実際の運用の研究には、言語学は二つの関連分野、すなわち通信の数学的理論と情報理論との、素晴らしい成果に大きく助けられてきた。通信工学は、この会議のプログラムにはなかったけれど、シャノンやウィーヴァー、ウィーナーやファノ、あるいは、すぐれたロンドン・グループの著作の影響を受けていない発表はほとんどなかった。皆、無意識のうちに、符号化とか、複合化とか、あるいは冗長度(余剰度)……のような、彼らの術語を使っていた。この通信工学と言語学との関係は、正確にはどうなのであろうか。この二つの学問の間に、何か合わないところでもあるだろうか。いや、全然ない。実際、構造言語学と通信工学者たちの研究とは、目的が一致している。それならば、通信理論を言語学に用い、またその逆をするということは、実はどういうことなのであろうか。確かにある点では、情報の交換については工学者のほうが正確にはっきりと系統立てているし、技術的にもしっかりしている。また量的に表わすという点でも、有望な可能性を見せていると認めざるをえない。一方、言語学者は、言語およびその構造に関するぼう大な経験によって、工学者が言語資料を扱う際の矛盾や失敗を見つけることができる。言語学者と人類学者との協力のほかに、言語学者が、そしておそらく人類学者も同じだと思うが、通信工学と絶えず協力していくということが、極めて有益なことだと思うのである(Jakobson 1953=1993 : 6)

引用からは、発表からわずか四年のうちに通信理論が多くの言語学者たちの心を掴み、言語学者たちがその用語で言語を説明し始めた様子がうかがい知れる。工学知識の応用という同会の理念は、早くも

図2

要因	機能
コンテクスト	関説的機能
メッセージ	詩的機能
発信者――――――受信者	心情的機能――――――動能的機能
接触	交話的機能
コード	メタ言語機能

実を結んだかのようである。

同会議を経て、一九六〇年、ヤコブソンは上記の新しい言語モデルを発表する(25)。

通信モデルと同様にヤコブソンの言語モデルの諸要因も、それぞれが担う機能と対応しながら一つのコミュニケーション像を構成している。

通信モデルと比べると、一見して、コードとコンテクストという要因が新たに加えられる一方、トランスミッターとレシーバーが消去されているのが分かる。両モデルの連続性を前提に、コードという語を以下のように解釈すると、両者の同一性が推定できる。すなわち、コードとは、符号化と復号化の機能の全体を統括する要因である。つまり、メッセージとシグナルの「承認された変換」機能と、それを担う諸要因の総体を表現している。ヤコブソンが、言語学で通用する言語体系を指す「ラング」でなく、「コード」という語を使用しているのは、「変換」を前提にモデル化を推し進めたからであり、ヤコブソンの言語モデルは、一言で言うと、「変換」を常態とした言語伝達のモデルなのである、と。また、コードが加わると同時にトランスミッターとレシーバーが消えているのは、日常的な

言語伝達に、たとえば電話機のような変換機能を担う装置が介在しないからではなく、コードを共有する発信者と受信者が、変換機能を果たす装置を埋め込んでいる存在と見做されているからである。また、コードに対応するメタ言語機能は、発信者と受信者(あるいはどちらか)が、彼らの間で使用されているコードの同一性を確認する必要が生じたとき、つまり変換、または再変換に異変が生じたときに、発話の照準をコードそのものに合わせるという形で発揮される[26]。メッセージの変換に干渉する好ましくない要素をノイズと呼ぶならば、ノイズの発生でメタ言語機能が働き始めると言い換えることができる。ヤコブソンの言語モデルは、ノイズによって変換機能の異変が察知され、コードに焦点があたるという因果関係も、通信モデルと共有していると考えられる[27]。

次に、コンテクストについても両者の連続性から次のような解釈が導ける。ヤコブソンによれば、コンテクストは、一般的意味に対する文脈的意味(contextual meaning)という意味本来の問題を扱うために不可欠な機能を担う[28]。通信モデルを発表した後、シャノンらは、それをコミュニケーションの一般モデルに発達させる構想を抱いていた[29]。通信モデルは「メッセージはメッセージ」の等式でコミュニケーション研究を先導したが、この等式は、メッセージが伝達する形式を表現したものにすぎなかった。情報理論は電気通信に理論的基礎を提供し、言語学の領域にも大きな影響を与えたが、それ自体では文脈に依存する実際の意味の伝達は説明できなかったのである。ヤコブソンの言語モデルは、コンテクストという新しい要因を付け加えることで、通信モデルを補完する役割を果たした[30]。

本節にあるようなヤコブソンについての解釈を明確に否定するのが、次節で紹介するシルヴァスティンらの議論である。

2―2

シルヴァスティンらの議論の意義を理解するために、まず、その思想形成の土壌になった二〇世紀のアメリカ言語学界の様子を、ヤコブソンを軸に概観しておこう。

ヤコブソンは、生地ロシアでG・W・F・ヘーゲル（Hegel, G. W. F. 一七七〇～一八三一年）の全体性と弁証法の哲学、E・フッサール（Husserl, E. 一八五九～一九三八年）の現象学などを学んだ後、プラハに渡り、N・トゥルベツコイ（Trubetzkoi, N. 一八九〇～一九三八年）らと構造主義プラハ学派の立ち上げに参画する。当時のプラハは、フッサール現象学、新カント主義哲学、K・ビューラー（Bühler, K. 一八七九～一九六三年）の言語理論のほか、人間の認知心理における全体的構造や状況依存性の重要性を説くゲシュタルト心理学が隆盛した場所だった。ナチスの難を逃れてアメリカに渡ったヤコブソンは、一九四九年に、コロンビア大学から多くの大学院生を引き連れて、ハーヴァード大学に移り[31]、そこでパースの記号論を発見することになる。ヤコブソンが教鞭を執り、後にシルヴァスティンが学部、大学院に所属する同大では、パースが残した膨大な草稿を所蔵していただけでなく、一九三一年からそれらを編纂し、出版する事業が進行していた。パースの記号論は、一九七〇年代以降、分析哲学の分野で再評価されようになる。ヤコブソンはすでに一九五〇年代に、その重要性に気づき、以後、パースの記号論を基礎に自らの言語理論の構築を進める。ヤコブソンが特に注目したのは、パースによる、類像icon、指標index、象徴symbolの三分類だった。これらは順に、類似的関係性、隣接的関係性、慣習的・イデオロギー的関係性に基づいて作用する記号様態を意味する[32]。こうしたパースの記号論に基づい

て、ヤコブソンは、言葉を、文法・論理、詩学、文芸、美学、行為論、出来事論、認識論にまたがるものと見做す広汎な理論を築いていった[33]。

パースの記号論に依拠し、文法から認識の問題までを横断的に取り扱うヤコブソンの理論に対しては、ヤコブソンの弟子のなかにさえ、言語学の外に置かれるべきものとして理解する者がいた。二〇世紀半ばのアメリカ言語学は、新ブルームフィールド学派の形式主義の言語学と、そこから派生したチョムスキーの合理主義的言語論が席巻していた。コロンビア大学からの異動の際に付き従った大学院生のなかに、M・ハレ(Halle, M. 一九二三年〜)がいた。ハレは、ヤコブソンの下で学んだ後、生成文法学派に転じてチョムスキーとともに同学派を率い、生成音韻論の創設者として言語学史に名前を残すことになるのである[34]。

ヤコブソンの理論の真髄であるパースの伝統を引き継いだのは、形式主義の言語学の外の、言語人類学の学徒だった。そして、言語の主流から外れた言語人類学による継承を奇貨として、ヤコブソンの理論は、その可能性を開花させていく。すなわち、主に言語と詩学・文学との関係に集中し、言語と文化、社会との関係が手薄だったヤコブソンの理論は、D・ハイムズ(Hymes, D. 一九二七〜二〇〇九年)、シルヴァスティンら言語人類学者たちに継承された結果、社会、文化、歴史を記述、分析できる基礎理論として展開したのである[35]。

シルヴァスティンは、ハーヴァードでの学部生、院生時代にヤコブソンに師事し、北米西海岸の言語人類学的フィールドワークの成果で博士号を取得、一九七〇年代初頭にシカゴ大学に移り、現在、同大が誇る斯界の第一人者として人類学、言語学、心理学を担当している[36]。

小山の解説を手引きに、シルヴァスティンが継承したヤコブソンの言語理論を、そのモデルとともに概観しよう。小山は、コミュニケーションに関する三つのモデルを比較しながら、最終的に、言語人類学が到達したモデル（出来事モデル）の特長を説明する。出来事モデルに先行する二つのモデルが、シャノンらの通信モデルとヤコブソン言語モデルである。以下、小山の行論に随い、それぞれのモデルの主題に注目しながら、通信モデルと言語モデルを、両者の関連性を念頭に再度検証してみよう[37]。

通信モデル（情報理論的・サイバネティクス（機械論的）モデル[38]）

本稿の第一章第一節にある通信モデルの模式図には載っていないが、符号化 encode、復号化 decode の語から分かるように、通信モデルでもトランスミッターとレシーバーが同じコードを共有していることが前提されている。小山もこの点に言及した上で、通信モデルにおけるコミュニケーションの成功が、同一コードの共有にあることに注意を促す。そして、このモデルにおけるコミュニケーションが、情報をあたかも導管を通すようにある地点から別の地点に運ぶことに還元されること、そして、このモデルにおけるメッセージがコミュニケーションに先立って所与のものとして存在し、ただ送られるだけのものでしかないことを指摘する。すべての意味がコードに内包されているため、意味というものを考える際にコンテクストを必要としない。換言すれば、通信モデルのメッセージは「脱コンテクスト化」された意味しか持ち得ないのである。コミュニケーションは、相互行為の出来事ではなく、単なる情報の伝達に矮小化される。小山は、通信モデルのこのようなコミュニケーション観を、「導管メタファー〔conduit metaphor〕」に基づくイデオロギーと呼んで批判する[39]。

通信モデルは、「脱コンテクスト化」された意味と、解釈コードである文法を研究対象とする学派（新ブルームフィールド派やチョムスキー派）に受け入れられる一方、自然言語を記述する学徒にとっては有効なモデルたりえなかった。実際の言語使用が常にあるコンテクストの中で生起することを考えれば、脱コンテクスト化された意味しか扱えないモデルが役に立たないのは当然だった[40]。

このように「脱コンテクスト化」した解釈コードから「メッセージ」に機軸をずらすのに成功した[41]のが、次に見るヤコブソンの言語モデルである。

言語モデル（ロマン・ヤコブソンによる「六機能モデル」）

ヤコブソンは、言語が果たす役割には様々な機能があると考え、言語によるコミュニケーションを構成する六つ要因をそれぞれに対応する機能とともにあげ、モデル化を行った。それが、「メッセージ」「送り手」「受け手」「接触回路」「コード」「言及指示対象」の六要因と、それぞれに対応する「詩的機能 poetic function」「表出的機能 emotive function」「動能的機能 conative function」「交話的機能 phatic function」「メタ言語的機能 metalingual function」「言及指示的機能 referent function」の六機能である[42]。

本章の前節で紹介したモデル（図2）と比較すると、小山らの説明では、「コンテクスト」が「言及指示対象」に、「関説的機能」が「言及指示的機能」に置き換えられている。図2の「コンテクスト」に対応する「関説的機能 referential function」は、関説（指示）される第三人称をあらわすものである[43]。ヤコブソンは、言及対象 referent が「コンテクスト」に存在するものであることから、言及対象を「コンテクスト」と呼んでいるのである[44]。ヤコブソンの使う「コンテクスト」が、文脈的 contextual 意

味と関説(事)物 referent の双方を含むことを勘案すれば、図2と小山らの説明に齟齬は生じない。したがって、図2を念頭に議論を進めても支障ないが、混乱を避けるために、以下、小山らの訳語を使用する。

さて、本章の前節では、通信モデルと言語モデルの差異として、トランスミッターとレシーバーが後者に、コードが前者にない点をあげた。トランスミッターとレシーバーが「承認された変換」を担うには、変換規則の体系であるコードを必要とする。コミュニケーションを構成する要因としてあげっていないが通信モデルでも、変換を司るコードが前提されていると考えるのが妥当である。通信モデルの要諦がトランスミッターとレシーバーにチャンネルを含めた三要因がコードを参照しながら変換を行っているところにある点は、既に説明した。

通信モデルでは、ノイズの発生という変換の異状が感知されると、変換作業を行う三要因の障害として処理され、三要因のいずれにも問題がなければ変換の規則を司るコードの障害が疑われるという審級がある。

言語モデルではどうか[45]。

コミュニケーションのチャンネルに焦点をあてる機能、つまり言語モデルの「交話的機能」には、確かに、ノイズの発生に相当するケースへの対応が含まれる。電話で相手の声が遠いときや、沈黙が長く続いた際の呼びかけ(例えば、「もしもし」)は、相手とのチャンネルが正常に機能しているか否かを確認するためのメッセージである。しかし、「交話的機能」には、チャンネルの保守、確認以外に、コミュニケーションを開始したり、継続したり、終結させる働きも含まれる。コミュニケーションは、挨拶によって開始、終結し、沈黙の気まずさを紛らわす会話によって継続もする。言語モデルのチャンネルは、

確かに「承認された変換」を保証する機能を担うものの、それ以上の多様な機能を担っている。

また、話が通じないとき、同一のコードを共有しているか否かを確認するために、送り手はコードに焦点をあてたメッセージを送ることがある。「〜とはどういう意味ですか」という発話がその典型である。コードに対応する「メタ言語的機能」にも、確かに、ノイズの発生に相当するケースでのメッセージの働きが含まれる。前記の発話状況の例からすると、コードに基づく正確な変換の不全が問題になっていると解釈しても無理はない。これに対し、小山は、言語に、意味コード(ラング)と言語使用(パロール)の側面があることを梃子に、「メタ言語的機能」にも二つの下位範疇、すなわち「メタ意味論的機能」と「メタ語用論的機能」があることを指摘する。前者のケースが、語彙や言い回しの脱コンテクスト化した意味を尋ねるメッセージである。この場合には、静態的なラングのコードが想定されている。後者のケースでは、例えば、教師がいやみな笑いを浮かべながら生徒をほめる状況があげられよう。言語によるメッセージの解釈は、教師の表情、声調、その他のコンテクストに強く依存する。後者で問題になるのは、語や言い回しの意味以上に、行為の意味、行為の解釈枠である。「メタ言語的機能」の範囲を、辞書、辞典にある文法、語彙など形式的、かつ静態的な意味のコードに限定するならば、そのモデルは、後者の例のような「メタ語用論的機能」をするメッセージを取り扱うことはできないだろう。通信モデルは、電気通信の数学的モデルという出自からして、当然、静態的な意味でのコードを想定する一方、意味コード以上の解釈枠については想定されていないと考えなければならない。他方、言語モデルの「メタ言語機能」に「メタ語用論的機能」が含まれるならば、そのコード概念の外延は、通信モデルのそれよりも広いと結論すべきだろう。

言語モデルの六つの要因のうち、最もこのモデルに特徴的なのが、メッセージとそれに対応する「詩的機能」である[46]。「詩的機能」とは、メッセージそのものに焦点をあてる言語の働きである。坪井によれば、「詩的機能」は「反復作用によりメッセージがメッセージ自身を指し示す機能であり、これによってメッセージは『地』であるコンテクストからフィギュア(図)として浮かび上がり、コンテクストから切り離されてテクストとして生成される(テクスト化・脱コンテクスト化する)」(小山二〇〇八:八一)過程であり、この過程が最も顕著に見られるのが「詩」(韻文)である。また、小山は、「詩的機能」が「文法研究(言語学)と文学研究(詩学)とを理論的に統合することを目指したヤコブソンの学問においても中心的な位置を占めるものであり、この機能の定義も、文法(言語構造)研究の理論的枠組と直接につながるかたちで為されている」(小山二〇〇八:二一四)と指摘する。「テクスト化:テクストの生成」、「反復作用によるメッセージの図化」、および「詩学と言語学を統合する言語理論」をキーワードに、言語モデルの「メッセージ」をさらに詳しく見ていこう。

小山は、「詩的機能」の定義が、文法構造(ラング)と言語使用(ディスコース、パロール)との関係、つまり言語理論の根幹に関わるものであることから、「詩的機能」を、「選択 selection」と「連結 combination」というソシュール的な二つの根本原理から説き起こす[47]。大統領候補だったD・アイゼンハワー(Eisenhower, D. 一八九〇〜一九六九年)の選挙用フレーズ、“I like Ike”を例に採ろう(Ikeはアイゼンハワーの愛称)。まず、主語部分では、一人称・二人称代名詞の範疇列から「I」が「選択」されている。同じく動詞句の動詞部分では、感情を表わす動詞の範疇列から「like」が「選択」され、目的語部分では男性のファースト・ネームの範疇列から「Ike」が「選択」されている。それぞれの範疇列

に属する要素（感情を表わす動詞なら、like, hate, loveなど）の間に同一の属性（類似性）が認められる一方、異なった範疇列に属するもの（例えば、weとlike）の間にはそれが認められない。範疇列は、類似性similarityや同一性equivalenceという類像的iconicな原理に基づいて構成されているのが分かる。

他方、「連結性」の基底にあるのは、「連続性contiguity」の原理である。実際の文において、各要素は、連辞軸syntagmatic axis; axis of combination上に連続して現われる[48]。“I like Ike”という文でも、「I」「like」「Ike」の三語は各範疇列から「選択」された後に「連続」して現われている。同一範疇列の要素（I, you, weなど）が、文に「連続」して現われることはなく、ただ一つの要素が「選択」されて現われることになるのである。

ヤコブソンの詩的機能の核心は、一言で言うと、連続性の原理に基づいて形成されている連辞上に、類似性（同じものの反復）が見られるという点の指摘にある[49]。“I like Ike”の文では、「I」「like」「Ike」の間に二重母音（/ay/）の繰り返し（反復）がある。そのため、異なる範疇列から「選択」された要素にもかかわらず、要素間に類似性が成立している。翻って、“I hate John”のように反復のない文には、“I like Ike”にある詩的効果が認められない。なぜなら、「選択」された要素間の類似性が希薄だからである。まとめると、「同一性・類似性の原理は、範疇列（＝選択軸axis of selection）を構成しているのであるが、この原理が、連続性原理に基づいて形成されている連辞軸上に（「投射」されて）現われるとき、つまり、連辞軸上に同一ないし類似したもの（韻など）が反復して生起するとき、我々は、詩的機能が働いていると認めるのである」（小山二〇〇八：二一六―二一七）[50]

以上の「詩的機能」の解釈に基づいて、小山はヤコブソンの言語モデルの特長を、以下のように総括

する。

さて、これまでの記述から明らかな通り、ヤコブソンの六機能モデルの焦点は、解釈コードにではなく、メッセージ(＝テクスト)に置かれている。そして、このモデルにおいて、メッセージは「所与のもの」としては捉えられていない(前項で述べた、情報理論的(サイバネティクス的)コミュニケーション・モデルでは、メッセージが「所与のもの」として扱われていたことに注意されたい)。すなわち、ヤコブソンは、コミュニケーションを通して構成されるものとしてテクストを捉え、上述の六つの機能のみならず、テクストの生成過程のメカニズムも明らかにした。言い換えるならば、ヤコブソンの六機能モデルの核心は、テクスト(化)とコンテクスト(化)の相互作用としてのコミュニケーションを理解する点にこそある(cf. Silverstein & Urban, 1996)(小山 二〇〇八：二一七―二一八)

ここで言う「テクスト」とは、コンテクストから区別されることで、我々に認識可能なものとして浮かび上がってくるもの、すなわち、理解・解釈や相互行為が織り成すものとしての「テクスト」であって、書物やそこに書かれている文などの、いわゆる「書かれた作品」ではない[51]。テクストとしてのメッセージは、コミュニケーションを通じて構成されるものであり、コミュニケーションに先立って送り手の元で予め決まっている類のものではない。メッセージは「所与のもの」ではなく、詩的効果のあるテクストとして生成されるのである。ヤコブソンの言語モデルの核心には、このような生成の過程が

あり、これを言語モデルのコミュニケーション像と理解することができるだろう。この点で、言語モデルは通信モデルと質的に異なるモデルだと言い得る。この生成過程を、小山は、「テクスト化」と「コンテクスト化」の相互作用と表現する。

> では、テクストを生成する過程とは、いかなるものなのだろうか。ヤコブソンによれば、それは、メッセージやその構成要素を具体物と化し reification、「持続するもの enduring thing」に変貌させることによって為される(cf. Jakobson, 1960 : 371)。より平易に言い換えるならば、テクストは、メッセージがコンテクスト(背景、グランド、地)から浮き立ち、コンテクストから区別されるフィギュール(フィギュア、図)となることによって、形成されるのである。そして、そのような過程を可能にしているのが、上述の詩的機能 poetic function である(小山二〇〇八 : 二一八)

以上の説明で、「詩学と言語学を統合する言語理論」から説き起こした議論が、「テクスト化 : テクストの生成」、「反復作用によるメッセージの図化」と繋がる。詩の特徴は、そのテクストがコンテクストから顕著に浮き立っているところにある。この特徴を根底で支えているのが、類似した単位の繰り返しの意味での「反復」、すなわち「同一性・類似性の原理が連結軸の上に現われる」事態である。類像性 iconic(あるいはその極端な現われとしての同一性)の原理に基づく「反復」がテクストを構成し、テクスト(メッセージ)が地としてのコンテクストから図化する。言語モデルの核心には、ゲシュタルト心理学の図―地の原理を基礎にした、テクスト化とコンテクスト化の相補的な過程が認められるのである。

コミュニケーションの要因に限れば、通信モデルと言語モデルはほぼ同一と見做せる。これに対し、小山らは、ヤコブソンの言語モデルではメッセージが所与のものとして想定されておらず、コミュニケーションを通して構築されていく点を指摘し、通信モデルとの異質性を主張した[52]。ここまでの議論で言語モデルの「メッセージ」が、導管モデルと規定される通信モデルの「メッセージ」と異なる以上、コミュニケーション像において、両者の連続性を想定するのは誤りと判断しなければならない。

出来事モデル（現代言語人類学における「出来事モデル」）

通信モデルで開示された、コミュニケーションの機能に関するヤコブソンの理解は、その後、ハイムズ、シルヴァスティンらによって現代言語人類学の「出来事モデル」に引き継がれ、発展していく。すなわち、出来事モデルでは、メッセージではなく、出来事 event を中心に概念化が進む[53]。

まず、ハイムズは、ヤコブソンの言語モデルの六つの要因を踏まえつつ、言語人類学者などによる経験的な研究に基づき、コミュニケーションの出来事の構成要因として以下の七つの要因を同定する[54]。すなわち、「コミュニケーションの参加者 participants：送り手と受け手、話し手と聞き手、など」「接触回路とその使用様式 channels and their modes of use：発話、書記、身振り、笛、など」「コード code：言語的、非言語的、音楽的などを含む」「コミュニケーションが起こる環境 setting」「メッセージの形態とジャンル the forms of messages, and their genres：単一の形態素からなる文から複数の文まで」「メッセージの内容 topics and comments」「出来事そのもの」の七つである。

このモデルで「メッセージ」の概念は上記の要因を含意するものとして理解されている。ハイムズの

モデルの登場によって、「メッセージ」ではなく「出来事」を中心にコミュニケーションを概念化する可能性が拓かれた。ここで言う「出来事」には、言語的なメッセージの授受行為に限らず、笑い、楽器の音、顔つき、動作などが含まれる。そして、これらの「出来事」は、コンテクストを指し示すことによって、自らを「テクスト化された(社会文化的な意味づけが可能な)出来事」として浮かび上がらせ、同時に、新たなコンテクストを創り出すのである[55]。

ハイムズの出来事モデル[56]はシルヴァスティンに継承され、記号論的により洗練されたモデルに体系化される。すなわち、出来事モデルは、「言われたこと」(言及指示的側面)と「為されたこと」(非言及指示的・社会指標的・相互行為的側面)の二側面での「テクスト化」と「コンテクスト化」の連鎖を概念化したモデルに更新される[57]。

そもそも理論的には無限の解釈の可能性を秘めた「なまの出来事」が、社会文化的に意味を持つ出来事として解釈されるのはなぜだろうか。ある出来事が意味のある出来事になるには、まず、出来事を包含するコンテクストが前提的、または創出的に指し示されること(=「コンテクスト化」)が必要である。日常生活おけるコミュニケーションでは、出来事とコンテクストの間に、まとまりやつながりが認められる。そのようなまとまりやつながりを生み出している原理こそ、コミュニケーションにおける「類像化作用 iconization」、すなわち「詩的機能」である。「類像化作用」が働くおかげで、通常、出来事によるコンテクストの喚起が偶然性に委ねられることはほとんどない。「なまの出来事」は、相互行為の「モデル」をコンテクストとして指し示し(コンテクスト化)、指し示された「モデル=type」によって、その「現れ=token」として指し返される(=テクスト化される)ことで、社会文化的に意味をなす「相互

行為のテクスト interactional text」を創り出す[58]。そして、そこで生み出された「相互行為のテクスト」は、新たなコンテクストを創出すると同時に、出来事以前に前提とされていたコンテクストを変容させる。こうして、ある出来事を契機に、「コンテクスト化」と「テクスト化」の過程が次々と連鎖的に生起していくのである[59]。

ハイムズ、およびシルヴァスティンの出来事モデルからは、ヤコブソンの言語モデルと同形の「テクスト化」と「コンテクスト化」の相補的過程を読み取ることができる。加えて、出来事における「コンテクスト化」と「テクスト化」の連鎖の過程がより明示的に説明されている。

以上から、パースを文脈に解釈するとき、言語モデルと出来事モデルには正統な連続性が認められるが、両モデルと通信モデルの間には連続性を認められない、と結論できる。

2―3

通信モデルと言語モデルを関連付けたマクルーハンの理解の是非を判断しよう。

マクルーハンのヤコブソン批判の焦点は、その「構造主義」的性質にあった。マクルーハンは、ソシュールを筆頭にした「構造主義者」の議論を取り上げ、コミュニケーションにおける通時態と共時態の区別を評価する一方、両者の関係性の考察が欠如している点を批判した。そして、その欠如が「図と地」のアイディアについての理解不足に由来すると主張した。マクルーハンによれば、「構造主義者」たちが「図と地」のアイディアについて十分に理解しないため、コミュニケーションの議論が通時態と共時態の一方に特化したもの、ほとんどのケースで歴史性を欠き、共時態に特化した(視覚的、左脳的な)も

のになる。マクルーハンの言う「構造主義」とは、図と地の理解の欠如に起因する、ある種の還元主義と言い換えられるだろう。

小山は、シルヴァスティンが共時的形式主義の代表である生成文法を否定していないところに注意を促す[60]。シルヴァスティンは、形式を機能に還元しようとしたり、逆に、機能を無視して形式のみを研究しようとしたりする現代の文法論のやり方を一貫して批判し、形式(象徴)と機能(指標)の相関の理論化ことこそが、文法論の責務であると主張してきた。極端に走らず、また単なる折衷を超えた統合の理論を可能にしたのが、ヤコブソン、そして、ヤコブソンを経由したパースの記号論だったのである。

ヤコブソンがパースの記号論のなかで類像、指標、象徴の三分類に特に注目した点は既に述べた通りである。例えば、ソシュールの文法論の機軸である連辞と範疇列が指標性と類像性で説明できたように、パースの記号論、およびそれに依拠するヤコブソンの言語理論は高度に包括的な理論だと言える。そして、包括的であることによって、その理論が記号の一機能の研究に特化した他の理論と一線を画す点は、強調されてよいだろう。

パースの記号論を基礎にすると、ソシュール、チョムスキー、レヴィ＝ストロースの議論の還元主義的性質を指摘することもできる。すなわち、ソシュールの言語学からは共時態の研究、チョムスキーの文法論からは文法形式の研究、レヴィ＝ストロースの神話分析からは静態的神話構造の研究に特化する傾向を指摘できる。三者に共通するのは象徴の研究への特化であり、それ故、包括的な体系性を欠く点で三者は共通するのである。特にチョムスキーの文法論は、その形式的性格で通信モデルと極めて親和性が高いことも分かる。この集団にヤコブソンが入らない点についてもはや贅言は不要だろう。ヤコブ

ソンの言語モデルは、特定の機能、あるいは位相への特化とは逆の、包括的な体系性を備えていた。

「構造主義」批判に限定するならば、マクルーハンの議論はパースの記号論のなかで整理できる。パースの記号論を基礎にすると、マクルーハンの「構造主義」の範囲に、ソシュール、チョムスキー、レヴィ＝ストロースは含まれる。そして、「構造主義」と通信モデルを関連付ける点にも問題は生じない。しかし、ヤコブソンを「構造主義者」に含めることにも、その言語モデルを通信モデルと関連付けることにも妥当性は見出せない。パースの記号論を前提に考えると、少なくともマクルーハンの立論では、「構造主義」や通信モデルと、ヤコブソンの理論の関連性は立証できない。

三章──まとめ

ここまでの論考で、少なくともマクルーハンの理解する意味での「構造主義者」にヤコブソンを含めるのは無理があることが分かった。

構造主義批判におけるマクルーハンの勇み足については、これを認めない訳にいかない。とはいえ、この勇み足によってマクルーハンの思想の本質が看過されてはなるまい。確かに、マクルーハンのヤコブソン理解は不十分だった。しかし、通信モデル批判の焦点、および通信モデルへの批判が図と地の発想に基づく詩的言語の追究に向かった点に注目すると、マクルーハンの発言からは、言語理論に対する無理解のみならず、ヤコブソンの言語理論との類似性、およびパースの記号論と通底する思想さえ認めることができる。

マクルーハンが、通信モデルを「パイプライン・モデル」と表現し、批判した理由は、このモデルが、送り手が意図したメッセージの導管輸送に特化したコミュニケーション観を創出し、コミュニケーションの主題を「メッセージ＝メッセージ」の等式の保証に切り詰めたからである。ここで重要なのは、マクルーハンが、送り手によるメッセージの発信の意義を否定したわけではない、という点である。

マクルーハンのメディア研究の主題は、メディアの理解、より正確に言えば、メディア環境からの影響（＝「メディアのメッセージ」）の理解にある。マクルーハンによれば、この影響は潜在的で、直接的な検証では接近できない。メディア環境に住まい、環境としてメディアから常に影響を受けているにもかかわらず、人間は、新旧のパラダイムの一方が地となり、他方が図化する転換期を除き、メディア環境の存在にさえ気づかない。マクルーハンのメディア研究の特徴は、メディア環境が自ずと図化した様子を範例に、メディア環境に対してことばによる間接的な接近を図るところにある。マクルーハンのメディア研究は、環境に埋没した人間がことばを「正しく」操ることで環境を超越するという意味での、人間の復権を基調にしているのである[61]。

マクルーハンの言う詩人になるためには、まず、「言語と文化の全体性を、個人的才能がかかわりを持つべき統一された地」（McLuhan & Powers 1989 : 21）と見做す必要がある。この認識を欠く者に詩人の資格はなく、そのような者の発言には詩の機能も期待できない。そして、詩的言語による文化的パラダイムの顕在化を志向しないすべての詩論は、「地を欠いた図」、または「左脳的」と糾弾される。逆に、「統一された地」からの超越（＝図化）を図り、その企てをことばによって実践する者には詩人の資格が賦与される、そして、「図と地」の接合関係を言語化する議論のみが詩論と評価されるのである。

マクルーハンは、詩論を追究すると同時に、自らに詩人たることを課した。その著書にちりばめられたアフォリズムは、メディア環境というコンテクストを超越し、そこから浮かび上がる「テクスト」をめざすことばの群なのである。ヤコブソンが、テクストがコンテクストから顕著に浮き上がることで、コンテクストであった形式的な構造化を地として観察できることを指摘していたのを想起すれば、両者の思想に類似性を認めるのは難しくない。また、マクルーハンのメッセージを、「所与のもの」ではなく、詩的効果のあるテクストとして生成されることばと解釈すれば、通信モデルへの批判において、両者の焦点は同じ一点で結ばれることになる。

テクストの構成原理についても、両者の思想に類似性が認められる。ヤコブソンは、「類像性 iconic」の原理に基づく「反復」をテクストの構成原理として挙げた。そして、マクルーハンは、図と地の「界面」で形成される関係を「イコン的 iconic」(McLuhan & Powers 1989 : 23) と表現していた。「図と地」を「テクストとコンテクスト」に置き換えれば、マクルーハンもまた、テクスト化の要件にことばの「類像性 iconic」を挙げたものと解釈できる。実際、“The medium is the message.”(「メディアはメッセージ」)は、“The message is the message.”(「メッセージは(=)メッセージ」)、およびこのテーゼを自明のものとする通念をコンテクストにしつつ、テクスト化したことばである。「メディアはメッセージ」が詩的言語たりうるのは、まず、批判の対象となる通信モデルを“message”と“message”の「同一性」(= MM)に基づくテーゼで総括することが前提となっている。その上で、連辞の「連続性」と選択の「同一性(類似性)」の点でこのテーゼと同形(= MM)でありながら、”message”を“medium”に置き換える操作で、当初の意味を図化させつつ反転させる詩的効果を生み出したのである。そして、これ

以後、“The medium is the message.”がマーシャル・マクルーハン(＝MM)の代名詞となったわけである。

“The medium is the message.”のテーゼは、程なく、メディアのメッセージの触覚的性質を表現する“The medium is the massage.”(「メディアはマッサージ」)に変形した[62]。一九六九年の*Counterblast*(『カウンターブラスト』)には、これまでに発明されてきた数多くの人工物が散在するメディア環境と、そこから及ぼされるメッセージの乱雑さ表現する“The medium is the mess age.”(「メディアは収拾のつかない時代」)が見られる[63]。このテーゼは、前年の論考[64]に登場する三つのテーゼ、すなわち、“The medium is the massage.”(「メディアはマッサージ」)、“The medium is the mass age.”(「メディアは大衆の時代」)、“The medium is the mess age.”(「メディアは収拾のつかない時代」)の一つである。このように先行するテーゼをコンテクストとして際限のないテクスト化を行うマクルーハンの戦略からは、単なることば遊び以上の、類像性への執着が読み取れる。

マクルーハンは、通信モデルとも、通信モデルへの局地的な異議申し立てとも異質な、まったく新しいコミュニケーションのモデルを構想した。その意図が詩的言語を追究する詩論に収斂することは既に述べた[65]。本稿でマクルーハンによるヤコブソン理解の是非を論じた結果、図らずも、マクルーハンの詩論がヤコブソンのそれと極めて類似することが明らかになった。

両者の類似性を論うことの可否は、文献学的には、まずはパースの受容から検証されるべきだろうが、少なくともマクルーハンの著書の文献表にはパースの名前を見つけられない[66]。図と地のアイディアを授けたゲシュタルト心理学、さらにヘーゲルの全体性の哲学が時代の空気として両者をつないだ可能性も、今後の検証課題として残る。そして、図と地のアイディアに注目するならば、認識対象と認識主

体のそれぞれが図と地の構えを持つとした廣松渉（一九三三～一九九四年）の哲学を避けて通ることはできまい。また、パースに基づくヤコブソン解釈から導かれた「テクスト」の概念に注目するならば、やはり同時代のR・バルト（Barth R. 一九一五～一九八〇）らの仕事を避けては通れまい。

本稿では、主に論理の次元でマクルーハンとヤコブソンの類似性に逢着した。両者を繋いだコンテクストを問うならば、次にやるべきは、二〇世紀前半から半ばまでの時代の空気を再現する作業ということになるだろう。

（しばた　たかし・北海学園大学教授）

［引用・参照文献］

Benedetti, P. & DeHart, N. eds. (1997) *On and by Marshall McLuhan*, The MIT Press, Cambridge, Massachusetts.

Gordon, W. T. text & Wilmarth, S. illustration (1997) *McLuhan for Beginners*, Writers and Readers, New York.=(2001) 宮澤淳一訳『マクルーハン』筑摩書房

Heims, S. J. (1991) *Constructing a Social Science for Postwar America; The Cybernetics Grope, 1946-1953*, The MIT Press.=(2001) 忠平美幸訳『サイバネティクス学者たち』朝日新聞社

池上嘉彦(1992)『詩学と文化記号論』講談社.

Jakobson, R. (1960a) "Closing Statement : Linguistics and Poetics", Sebeok, T. A. ed. (1966), *Style in Language*, The MIT Press, Cambridge, Massachusetts, : 350-377.

Jakobson R. (1960b) "Linguistics and Communication Theory", Waugh, L. R. & Monville-Burston, M. eds. (1995) *On Language*, Harvard University Press, Cambridge, Massachusetts London : 489-497.

門林岳史(2005)「触覚、この余計なもの―マクルーハンにおける感覚の修辞学」『UTCP研究論集』2 : 45-56.

小山亘 (2008)『記号の系譜』三元社

小山亘 (2009)「シルヴァスティンの思想」『記号の思想』三元社 : 11-233.

McLuhan, M. (1967) *The Mechanical Bride*, Beacon Press, Boston (original work published in 1951).=(1991) 井坂学訳『機械の花嫁』竹内書房新社

McLuhan, M. (1997) *The Gutenberg Galaxy-The Making of Typographic man*, University of Toronto Press, Toronto Buffalo London (original work published in 1962).=(1986) 森常治訳『グーテンベルクの銀河系：活字人間の形成』みすず書房

McLuhan, M. (1964) *Understanding Media-The Extensions of Man*, McGraw-Hill, New York. =(1967) 後藤和彦・高儀進訳『人間拡張の原理』竹内書房＝(1987) 栗原裕・河本仲聖訳『メディア論：人間拡張の諸相』みすず書房

McLuhan, M. & Fiore, Q. (1967) *The Medium is the Massage*, Bantam Books, New York, London, Toronto.=(2010) 南博訳『メディアはマッサージである』河出書房新社

McLuhan, M. (copy right) (1968) "A Second Way to Read *War and Peace in the Global Village* or McLuhan made linear", *The McLuhan Dew-line*, vol. 1, no. 3, Human Development Corporation, New York.
McLuhan, M. (1969) *Counterblast*, designed by Parker H., Harcourt, Bruce & World, New York.
McLuhan, M. (1972) *Culture is Our Business*, Ballantine Books, New York(original work published in 1970).
McLuhan, M. & Watson, W. (1970) *From Cliché to Archetype*, The Viking Press, New York.
McLuhan, M. & Nevitt, B. (1972) *Take Today*, Harcourt Brace Jovanovich, New York.
McLuhan, M. & McLuhan, E. (1988) *Laws of Media*, University of Toronto press, Toronto Buffalo London.=(2002) 高山宏監修・中澤豊訳『メディアの法則』NTT出版
McLuhan, M. & Powers B. R. (1989) *The Global Village*, Oxford University Press, New York, Oxford. = (2003) 浅見克彦訳『グローバル・ヴィレッジ』青弓社
McLuhan, M. (2006) *The Classical Trivium-The Place of Thomas Nashe in the Learning of his Time*, Gordon, T. ed., Gingko Press, CA.=(1943) McLuhan, M. *The Classical Trivium-The place of Thomas Nashe in the Learning of his Time*, the Cambridge University doctoral dissertation.
Shannon, C. & Weaver, W. (1949) *The Mathematical Theory of Communication*, The University of Illinois Press.= (1969) 長谷川淳・井上光洋訳『コミュニケーションの数学的理論』明治図書出版= (2009) 植松友彦訳『通信の数学的理論』筑摩書房
柴田崇 (1998)「マクルーハンにおける『メディア』の概念―コミュニケーションモデルの検証を通じての一考察」『明治学院大学大学院国際学研究科 国際学研究科紀要』5 : 1-20.
柴田崇 (1999)「マクルーハンの身体論」『映像学』63 : 71-86.
柴田崇 (2010)「マクルーハンのリテラシー論―E・ハヴロックとの接点」『文芸学研究』14 : 1-22.
柴田崇 (2011)「解題『グーテンベルクの銀河系Ⅰ』」『マクルーハン』河出書房新社 : 34-37.
柴田崇 (2011)「前を見ること―マクルーハンの詩論」『マクルーハン』河出書房新社 : 90-99.
柴田崇 (2013)『マクルーハンとメディア論 : 身体論の集合』勁草書房

坪井睦子(2013)『ボスニア紛争報道』みすず書房
安酸敏眞(2014)『人文学概論』知泉書館

［註］

（1）柴田（二〇一三）

（2）ニューヨーク大学の物理学教授だったA・ソーカル（Sokal, A. 一九五五年〜）が起こした学問上の事件。一九九六年、ソーカルらは、フランスのポストモダン思想家、およびそれらを奉じる科学論者が使用する科学用語の誤りを揶揄する目的で、科学的にはでたらめな用語を散りばめた論文を作成し、文化研究の学術誌『ソーシャル・テクスト』誌（*Social Text*, Duke University Press）に投稿した。当該論文の掲載号が公刊された後、論文のでたらめ振りを暴露し、同誌の査読体制、および科学用語の安易な援用に疑問を投げかけた。この事件をきっかけに、科学者と科学論者との間の論争（一九九〇年代半ばに勃発した、いわゆるサイエンス・ウォーズ）が再燃した。

（3）単なる主観的な「意図」の再現を意味するのでもない点では、W・ディルタイ（Dilthey, W. 一八三三〜一九一一）に継承された解釈学とも通底すると考える。cf. 安酸（二〇一四：一六六―一六九）。

（4）ヤコブソン理解の問題点について、早稲田大学人間科学学術院の古山宣洋教授から御指摘があった。

（5）McLuhan (1964 : 242)

（6）McLuhan (1964 : 267)。同様の記述は、晩年の著書にも繰り返し見られる。たとえば、McLuhan, M. & McLuhan, E. (1988 : 86-91) ; McLuhan & Powers (1989 : 75-76)。

（7）「アメリカの応用数学者。ミシガン大学で電気工学と数学を学び、マサチューセッツ工科大学の大学院で電気回路理論を研究。一九四一年より五七年までベル電話研究所に勤め、四八年同僚のW・ウィーバーと共著で『コミュニケーションの数学的理論』を発表した。この本のなかで彼は、エントロピーの概念を使って情報量を定義し、現代の情報理論の基礎を築いた。五七年よりマサチューセッツ工科大学技術研究所教授」（ブリタニカ・オンライン・ジャパン）http://japan.eb.com/rg/article-05301100（二〇一四年一〇月一日取得）

（8）Shannon & Weaver (1949 : 5)

(9) Shannon & Weaver (1949 : 3)

(10) Shannon & Weaver (1949 : 99)

(11) 「メディアはメッセージ」の初出は、一九五八年の全米教育放送者協会の年次大会の基調講演とされている。cf. Benedetti & DeHart eds. (1997 : 31)

(12) 柴田（二〇一三：九―一二）

(13) ゴードン（ゴードン 1997＝2001 : 209）によれば一九七三年である。

(14) McLuhan & Powers (1989 : xi, xiii)

(15) マクルーハンによれば、アリストテレスとフライは、ともに「地を欠いた図」という左脳的思考に囚われている。cf. McLuhan (1988 : 87-91)

(16) 柴田（二〇一三：一四六―一四八）

(17) McLuhan (1964 : 3)。また、マクルーハンは次のようにも言っている。「もし『話しことばの内容は何か』と問われたならば、『それ自体は非言語的な、実際の思考過程』と答えざるを得ない」(McLuhan 1964 : 8)。この記述から、最も原初的な「発明」は「話しことば」ということになるが、話しことばが西欧に特有の「発明」ではないところから話しことばを含めた四つの区分を立てなかったのだと考えられる。

(18) マクルーハンが援用する「ゲシュタルト」は、専らルビンの「図と地」の知見であり、いわゆるゲシュタルト心理学一般の理解があったと考えるのには無理がある。cf. 柴田（二〇一三：一五〇）

(19) 一九七〇年代以降、マクルーハンの著書にはパラダイムの語が頻出する (e.g. McLuhan & Watson (1970 : 54) ; McLuhan & Nevitt (1972 : 122))。『地球村』(McLuhan & Powers 1989 : 21) では、共約不可能な二つの集合、または集合の認識方法を表現するためにパラダイムの語を積極的に使用しつつ、T・クーン（Kuhn, T. 一九二二～一九九六年）が、やはり「図-地」の発想を十分に理解せず、文化的地を欠いた図としてしかパラダイムの語を使用していない点で批判されている。

(20) マクルーハンが使用する「触覚的」の語には、いわゆる触覚的なものの意味に加えて、視覚と聴覚の二元論を調停するものとしての意味が込められており、特定の感覚様相に還元できない側面を持つ。マクルーハンの「触覚」

を「余計なもの」と指摘した門林（二〇〇五）の慧眼を付け加えておきたい。

(21) 柴田（二〇一一：三四―三七）、柴田（二〇一三：一二―一八）

(22) 柴田（二〇一一：九〇―九九）、柴田（二〇一三：一〇五―一五〇）

(23) =Saussure, F. de. *Course in General Linguistics*, Edited by Charles Bally and Albert Sechehaye in collaboration with Albert Reidlinger, Translated with introduction and notes by Wade Baskin, New York : McGraw-Hill, 1959 : 81.

(24) ハイムズ (Heims 1991=2001 : 396) を参照した。

(25) Jakobson (1960a : 353, 357)

(26) Jakobson (1960a : 356)

(27) 柴田（二〇一三：二六―三一）

(28) Jakobson (1960b : 495-96)

(29) Shannon & Weaver (1949 : 116)

(30) 柴田（二〇一三：二六―三一）cf. 柴田（二〇〇八）、柴田（二〇一〇）

(31) 小山（二〇〇八：六二）

(32) ソシュールは、言語構造の機軸を、連辞 (syntagm) とパラダイム (paradigm) に分類したが、前者は連続的関係性の指標性に、後者は同一的・類似的関係性の類像性に対応するものであり、パースの記号論の射程内にあると理解できる。cf. 小山（二〇〇八：一五九）

(33) 小山（二〇〇八：一五八―一五九）、小山（二〇〇九：六三）

(34) 小山（二〇〇八：一五七、一六一）

(35) 小山（二〇〇八：一六一―一六二）

(36) 小山（二〇〇九：六〇―六一）

(37) 小山（二〇〇八：二〇一以下）。坪井（二〇一三：七七以下）も参照した。

(38) 以下、各モデルの見出しにある（）内の表記は、小山による呼称。

(39) 小山（二〇〇八：二〇四）、坪井（二〇一三：八〇）

(40) 小山（二〇〇八：二〇四―二〇五）、坪井（二〇一三：八〇）。ヤコブソニアンによるチョムスキー批判を紹介する以上、本来ならば、正統なチョムスキー派の言い分も紹介し均衡を取るべきだが、両論の併記は本稿の力の範囲を超えるため、上記の点を留意すべきことを記すに留める。同様に、マクルーハンの「構造主義」の分類についても、一般的理解とはかけ離れたものであることから、議論の出発点における公平性の判断は留保しなければならない。構造主義人類学の祖とされるレヴィ＝ストロース、さらに、言語構造に言語学の焦点を導いたソシュールはともかく、チョムスキーを構造主義者に含めるのには飛躍がある。マクルーハンの「意図」が、このような一般理解を覆し、構造主義の内包の改変と外延の拡大にあったことは推測できるが、やはり、議論に均衡を図るならば、チョムスキーの理解を前提に改変の是非を検証する必要がある。その作業も本稿の範囲を超えるため、判断を留保すべき点のみ記す。

(41) 小山（二〇〇八：二〇七）

(42) 小山（二〇〇八：二〇七）、坪井（二〇一三：八〇）

(43) Jakobson (1960a : 355)

(44) 小山（二〇〇八：二〇七）

(45) 小山（二〇〇八：二一一―二一三）

(46) 小山（二〇〇八：二一四）、坪井（二〇一三：八一）

(47) 小山（二〇〇八：二一五）

(48) 小山（二〇〇八：二一六）

(49) 小山（二〇〇八：二一六―一七）

(50) 「ヤコブソンによれば、『詩的機能』は音声面だけでなく、意味の面でも見られるという。つまり、この“I like Ike.”というメッセージにおいては、感情の主体（＝I）が、感情動詞（＝like）にも、感情の対象（Ike）にも繰り返し現われており、そのことによって、感情の主体（＝有権者）と、感情の対象（＝大統領選挙候補者）との間に、「好む」という感情によって媒介された一体感を生み出すような効果が創出されていると考えられる(cf. Jakobson, 1960 : 357)」（小山二〇〇八：二一五）。Cf. の出典は文献表のJakobson, R. (1960a) と同じ。

(51) 小山（二〇〇八：二一八（脚注一四））。
(52) 小山（二〇〇八：二一八）、坪井（二〇一三：八一）
(53) 坪井（二〇一三：八一―八二）
(54) 小山（二〇〇八：二二〇）
(55) 小山（二〇〇八：二二一）
(56) 本節の前半で述べたように、コンテクストに対応する関説的機能とは、従来、関説される第三人称をあらわすものであり、ヤコブソンのモデルのコンテクストは、文脈的意味と指示言及対象（referent）の双方を含む概念だった。ハイムズは、その点を指摘し、コンテクストを、場面（situation）と話題内容（topic）に分割することで、ヤコブソンのモデルを修正した。もちろん、ここで言う修正とは、より正確な再現のためではなく、出来事を記述するためのものである。この意味で、出来事モデルは、言語モデルの修正版ではあっても、通信モデルの修正版ではありえない。ハイムズのモデルについては、池上嘉彦（一九三四年～）の解説（池上 一九九二：一八二）があるが、小山は池上のヤコブソン、およびハイムズの理解には批判的である（e.g. 小山二〇〇八：一五四）。
(57) 坪井（二〇一三：八一―八二）
(58) 小山（二〇〇八：二二三）
(59) 坪井（二〇一三：八二）
(60) 小山（二〇〇九：六〇）
(61) 「技術決定論」を、人間の働きかけの契機を持たないという意味で使用するならば、マクルーハンのメディア研究をその範疇に入れることはできない。cf. 柴田（一九九九：八二）
(62) Cf. McLuhan, M. & Fiore, Q. (1967) *The Medium is the Massage*, Bantam Books, New York, London, Toronto.
(63) McLuhan (1969 : 23)
(64) McLuhan (1968 : 9)
(65) 柴田（二〇一三：一三二―一五〇）
(66) トロント大学のトマス・フィッシャー希少資料文庫（Thomas Fisher Rare Book Library）には、マクルーハン

の現存する蔵書（死後、一部が焼失）が保存され、目録が公開されている（http://fisher.library.utoronto.ca/sites/fisher.library.utoronto.ca/files/mcluhanFA-june2014.pdf；二〇一四年一一月二七日取得）。同目録からは、ヤコブソンの著書として、*Fundamentals of language*, 1971 のみが確認でき、パースに関する著書（Gallie, W. B., *Peirce and pragmatism*, 1952）はあるものの、パース自身の著書は見当たらない。